

ドイツ・レクイエム演奏会

J.ブラームス

～ピアノ2台の伴奏による～

Ein deutsches Johannes Brahms Requiem

2013年11月4日(月)

盛岡市民文化ホール(マリオス)大ホール

主催／盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

ごあいさつ

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

代表 茂木容子

会場の皆様、本日はご来場いただき誠にありがとうございます。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン一同、主催者として心より御礼申し上げます。

本日の演奏会では、前半は、H. シュッツ、J. S. バッハの作品を当合唱団が歌います。後半は、長年の盟友である仙台宗教音楽合唱団と合同で、J. ブラームス「ドイツ・レクイエム」を2台のピアノとともに演奏いたします。

そして、東日本大震災の犠牲になられた方々、今なお心身ともに傷ついておられる方々の平安のために本日の演奏を捧げたいと思います。

ドイツ・レクイエムのソリストとしては、ソプラノに東京藝術大学大学院在学中ながら数々の演奏会でソロを歌っている村元彩夏さん、バリトンには我らがコンサートマスター小原一穂さんをお迎えします。お二人とも私どもの会員、つまりお仲間です。そして、ピアニストは、やはり会員である平井良子さんと、仙台宗教音楽合唱団の毎週の練習を支えてくださっている東浦綾郁さんが務めます。大曲、名曲を言わば「自前」で演奏できることを、密かに誇りに思うところでございます。

この夏、仙台のメンバーを含め私どもの多くはドイツに旅行し、佐々木聖歌隊の一員として演奏してまいりました。本日のプログラムの多くはその時に演奏した曲でもあります。彼の地では、教会の響きの良さに驚き、天を目指す空間を目でも楽しみ、本日演奏する曲を作った3人が辿ったかもしれない道を歩きました。私たちの拙いドイツ語に集中して耳を傾けてくださった聴衆の皆様と、演奏会開催に奔走してくださったすべての方々に、深く感謝しながら歌いました。その時の感激を胸に、また新たな気持ちで音楽を捉え、本日も誠を持って演奏したいと思っております。

なお、本日の演奏会には「第2回ウィーンフィル&サントリー音楽復興祈念賞」の助成をいただいております。会員一同深く感謝いたします。

どうぞ最後まで演奏をおたのしみくださいませ。

～ピアノ2台の伴奏による～ ドイツ・レクイエム演奏会

【第1部】

- H.シュッツ 『宗教的合唱曲集』より「涙と共に種を撒く人は」 SWV378
H.シュッツ 『宗教的合唱曲集』より「今から後、主のもとに死ぬ人々は幸せである」 SWV391
J.S.バッハ 『カンタータ 68 番』より「イエスを信じるもの、その人は裁かれません」 BWV68-5
H.シュッツ 『宗教的合唱曲集』より「これほどに神は世を愛しました」 SWV380
J.S.バッハ 『カンタータ 102 番』より「主よ、あなたの目は信仰を顧みます」 BWV102-1

【第2部】

- J.ブラームス 『ドイツ・レクイエム』 Op.45

独 唱 村元彩夏(ソプラノ) 小原一穂(バリトン)
ピアノ 平井良子 東浦綾郁
合 唱 盛岡バッハ・カンタータ・フェライン 仙台宗教音楽合唱団
指 揮 佐々木正利

2013 年 11 月 4 日(月)15:00
盛岡市民文化ホール大ホール

主催 盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

助成 第2回ウィーン・フィル&サントリー音楽復興祈念賞

「ウィーン・フィル&サントリー音楽復興祈念賞」は、東日本大震災を機にウィーン・フィルハーモニー管弦楽団とサントリーホールディングス(株)からの寄附をもとに、公益財団法人サントリー芸術財団に設立された基金の助成事業です。クラシック音楽を主体とする演奏活動・音楽普及活動等が対象の応募制で、音楽を通じ被災地および日本に活力を与え続けたい願いから、2012年から10年間行います。 <http://suntory.jp/fund/>

後援 岩手県教育委員会 盛岡市教育委員会 盛岡市文化振興事業団 岩手県合唱連盟 岩手日独協会

— 演 奏 曲 目 —

【第1部】（合唱：盛岡バッハ・カンタータ・フェライン）

H. シュッツ / 『宗教的合唱曲集』より「涙と共に種を撒く人は」 SWV378

H.Schütz / „Die mit Tränen säen“ aus der Geistlichen Chormusik 1648;

H. シュッツ / 『宗教的合唱曲集』より「今から後、主のもとに死ぬ人々は幸せである」 SWV391

H.Schütz / „Selig sind die Toten, die in dem Herren sterben“ aus der Geistlichen Chormusik 1648;

J. S. バッハ / 『カンタータ 68 番』より「イエスを信じるもの、その人は裁かれません」 BWV68-5

J.S.Bach / „Wer an ihn gläubet, der wird nicht gerichtet“ aus der Kantate Nr.68 （ピアノ：平井良子）

H. シュッツ / 『宗教的合唱曲集』より「これほどに神は世を愛しました」 SWV380

H.Schütz / „Also hat Gott die Welt geliebt“ aus der Geistlichen Chormusik 1648;

J. S. バッハ / 『カンタータ 102 番』より「主よ、あなたの目は信仰を顧みます！」 BWV102-1

J.S.Bach / „Herr, deine Augen sehen nach dem Glauben“ aus der Kantate Nr.102 （ピアノ：平井良子）

～～ 休 憩（15分） ～～

【第2部】（合唱：盛岡バッハ・カンタータ・フェライン 仙台宗教音楽合唱団）

J. ブラームス / 『ドイツ・レクイエム』 Op. 45 （ピアノ：平井良子 東浦綾郁）

J.Brahms / „Ein deutsches Requiem“

1. Selig sind, die da Leid tragen

2. Denn alles Fleisch, es ist wie Gras

3. Herr, lehre doch mich （バリトン：小原一穂）

4. Wie lieblich sind deine Wohnungen

5. Ihr habt nun Traurigkeit..... （ソプラノ：村元彩夏）

6. Denn wir haben hie keine bleibende Statt （バリトン：小原一穂）

7. Selig sind die Toten, die in dem Herren sterben

プロフィール

佐々木 正利 (指揮)

東京芸術大学声楽科卒業。同大学院修士及び博士後期課程修了。故須賀靖元 (声楽)、故服部幸三 (音楽学)、小林道夫 (演奏法)、森晶彦 (発声法)、故松本民之助 (作曲)、故岳藤豪希 (宗教音楽) の各氏に師事。

1973 年にバッハ「クリスマス・オラトリオ」の福音史家で楽壇デビューして以来、バッハをはじめとする宗教音楽のスペシャリストとして揺るぎない地位を得ている。1979 年シュトゥットガルトに渡り L. フィッシャー教授に師事。1980 年第 6 回ライプツィヒ国際バッハコンクール声楽部門第 5 位入賞。同年より 1982 年までデットモルト北西ドイツ音楽大学に学び、H. クレッチマール教授に師事。在独中は欧州各国の演奏会に招かれ、特に 1980 年ウィーン楽友協会ホールでのマタイ受難曲では『若き日の P. シュライヤー』と新聞各紙で絶賛される。

帰国後もライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団、ベルリン交響楽団、国立ブカレスト交響楽団、NHK交響楽団等、世界、日本の著名オーケストラのソリストとして度々起用され、K. マズア、H. シュタイン、H. ブロムシュテット、小沢征爾、R. シャイー等、世界を代表する数々の指揮者と共演。また世界的宗教音楽の名指揮者である H. リリング、H. J. ロッチュ、M. コルボ、R. ヤコブス等率いる、シュトゥットガルト・バッハ合奏団、ゲヒンゲン聖歌隊、聖トマス教会聖歌隊、RIAS 室内合唱団等の演奏会に度々出演し、高い評価を受けている。

特に世界的バッハ指揮者 H. ヴィンシャーマン率いるドイツ・バッハゾリステン演奏会には、ソリストとしてだけでなく自身が育てた合唱団も度々共演し、その歌唱力、合唱指導力によって絶大な信頼を勝ち得ている。

1979 年、1985 年ザルツブルグ音楽祭に招聘され、モーツァルト管弦楽団、ベルリン聖ヘドヴィヒ聖歌隊と、バッハ「マニフィカート」、モーツァルト「戴冠ミサ」等を共演し好評を博した。

在独中オペラでは、ヴェストファーレン州立歌劇場等で、『コジ・ファン・トゥッテ』のフェランド、『フィデリオ』のヤッキーノ、スカララッティ『グリゼルダ』のコッラード役で出演。

現在までリサイタル 32 回を数え、レコード・CD も多数リリース、またテレビ、FM 等にも度々出演している。

1970 年東京芸術大学バッハ・カンタータ・クラブの創設に携わり、多くの後進を育てると共に指揮者としての活動を開始。以後 40 年以上に亘って主に宗教曲の演奏に冴えをみせ、そのいずれもが名演の誉れ高い。特に盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団、岡山バッハ・カンタータ協会等を率いての 20 数回に亘るヨーロッパ公演では『シュッツ、バッハの世界的担い手』とした最大級の賛辞が新聞各紙に掲載され、1993 年のヴィンシャーマンとのマタイでは、『マタイ演奏史上、最も特筆されるべき演奏の一つ』、また 1995 年の J. ツィルヒ指揮ニュルンベルク交響楽団との天地創造では『音楽と言葉との見事なまでの融合』とその音楽作りが絶賛された。

1987、88 年には、リリング音楽監督のバッハ・アカデミーにて Ten. マスタークラスの講師を務め、またコダーイ・サマースクールや古楽サマースクール等でも指導講師に招かれるなど、その指導力については世界的に定評がある。門下生として世界の歌劇場で活躍する国際的歌手、オラトリオ・リート歌手、大学教授等音楽指導者を多数輩出しており、またコンクール優勝者等も数多い。

1994 年長年にわたる顕著な演奏・教育の業績に対し、第 47 回岩手日報文化賞 (学芸部門) が贈られ、2011 年には日独交流 150 周年を記念して、ドイツ大使館より日独友好賞 (功労賞) が授与された。

現在、岩手大学教育学部音楽教育科教授。二期会会員。日本声楽発声学会理事、日本音楽表現学会会長諮問委員、仙台バッハ・アカデミー理事。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団、岡山バッハ・カンタータ協会、東京 21 合唱団、東北大学混声合唱団、岩手大学合唱団、各指揮者、山響アマデウスコア音楽監督。混声合唱団コーロ・フォレスト芸術アドバイザー兼首席合唱指導者。二期会バッハ・バロック研究会講師。





村元 彩夏 (ソプラノ)

青森県五所川原市出身。岩手大学教育学部芸術文化課程卒業。東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程独唱専攻修了。現在同大学院博士後期課程に在籍。第20回友愛ドイツ歌曲コンクール第一位。文部科学大臣賞受賞。副賞としてウィーンにてリサイタルを行った。第60回「藝大メサイア」に出演。これまでに、J. S. バッハの教会カンタータやミサ曲、「ヨハネ受難曲」、「クリスマス・オラトリオ」、ヘンデル「メサイア」、シューマン、モーツァルト、フォーレ、ラター「レクイエム」、メンデルスゾーン「エリア」など、宗教曲のソリストを務める。2013年度日本演奏連盟新進演奏家奨励学生。声楽を佐々木正利、朝倉蒼生、秦喜美子、寺谷千枝子の各氏に師事。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン会員。



小原 一穂 (バリトン)

盛岡第一高等学校、岩手大学教育学部音楽科卒業。東京学芸大学大学院修士課程修了。森肇子、今関由紀子、中村義春、移川澄也、佐々木正利、P. フッテンロッハーの各氏に師事。H. クレッチマール、K. ヴィトマー各氏の公開レッスンを通じドイツ歌曲や宗教音楽の歌唱について研鑽を積む。バッハアカデミー修了演奏会に於いてH. リリングの指揮の下、ヨハネ受難曲のイエス役を歌い好評を得る。バロック〜ロマン派にかけての宗教曲や第九のソリストを多数務める他、歌曲や創作オペラ、ミュージカルの分野でも活躍している。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン会員、コンサートマスター。グルッペ・ベッヒライン会長。盛岡市立城西中学校指導教諭。



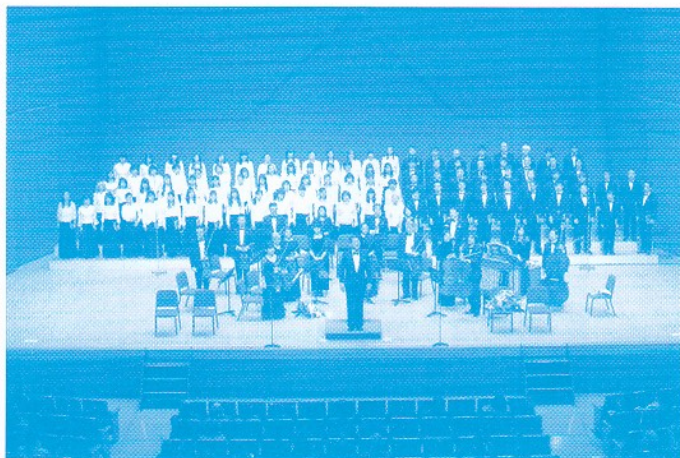
平井 良子 (ピアノ)

桐朋学園大学卒業。第2回日本クラシック音楽コンクールピアノ部門大学の部 全国大会特別賞受賞。全日本演奏家協会オーディション合格。第12回国際芸術連盟新人オーディション合格。マスタープレイヤーズ国際音楽コンクール”オーナー・ディプロマ賞”受賞。オルランド弦楽四重奏団、マルティヌー弦楽四重奏団、ウィーン木管五重奏団、東京ニューシティ管弦楽団、東京多摩交響楽団と共演。東京、盛岡市、北上市にてピアノリサイタル開催。サントリーホールにてジョイントコンサートに出演。小学校、福祉施設などの訪問演奏も行っている。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、如月の会、文月の会、もりおかセンチュリークワイアーのピアノ伴奏を務める。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン会員。



東浦 綾郁 (ピアノ)

宮城学院女子大学音楽科卒業。ピアノを佐竹由味子、菊地真知子の両氏に師事。在学中より、数々の合唱団でピアニストを務め、研鑽を積む。1999年には、合唱コンクール全国大会での功績が認められ、宮城県合唱連盟より表彰を受けている。ソロの他、デュオや室内楽にも取り組む。2002年には、第48回カワイサロンコンサートにおいて、ピアノデュオリサイタルを行う。現在、仙台宗教音楽合唱団、三声ミサの会、女声合唱団和ぐ、コールしおがま、コールヴァイオレット各ピアニスト。全日本ピアノ指導者協会、シューマン協会各会員。



盛岡バッハ・カンタータ・フェライン (合唱)

1977年「カンタータを歌う会」として発足。以来、一貫してJ. S. バッハの作品を中心としたドイツ・バロック合唱曲の研究、演奏を行っている。その演奏が、1991年ドイツにおいて「作品の語感、音、そして精神の完熟」という現地新聞の批評を受けるに至るまでには常任指揮者、佐々木正利のドイツ・バロック音楽に対する卓越した見識に基づく、熱意溢れる指導の積み重ねがあった。佐々木は超一流のエヴァンゲリストとして評価されるその発音、語感、様式感をもう一つのライフワークである合唱団の育成に注ぎ込み、その結果

「＜言葉が生きる＞と＜音楽が生きる＞とは歌の世界では同義語である」というフェラインの音楽信条が演奏上の身上となるに至ったのである。

その後、H. ヴィンシャーマン、H. J. ロッチュ、J. ツィルヒ、K. マズア、H. リリング、岩城宏之等、世界的指揮者との共演を重ね、各指揮者より、特にドイツ・バロック音楽を音楽的かつ人間的に表現できる合唱団として、熱い評価を得るようになった。この評価は、声の充実を追求する合唱団や、古楽器的な歌唱法を駆使して鮮烈な表現を目指す合唱団に与えられるものとは性格を異にする。暖かい音色を基調としながら、音楽の刻々と変化する様相を、その時々に対応しいニュアンスで大胆かつ繊細に、確信を持って表現しきろうとする、あくまで人間バッハへの共感を基調とする合唱団に対してのものなのである。

ミュンヘンのヘラクレスザールでハイドンの「天地創造」を演奏する（ニュルンベルク交響楽団）同じ週に、各地教会でア・カペラの小品を歌う。フェラインは、常に盛岡の教会での練習で培ったトーンを原点として活動してきた。

1998年から2007年にかけてH. ヴィンシャーマン指揮の下、バッハの四大大宗教曲全てを演奏した。今年の1月にはバッハ・カンタータのみの演奏会を開催し好評を博した。今夏、有志によるドイツ演奏旅行が成功裡に終わり、今回の演奏会はその帰朝報告演奏会の性格も併せ持つ。

仙台宗教音楽合唱団 (合唱)

1967年の創立以来、一貫して「宗教音楽」、特にドイツ・バロック期の宗教合唱歌曲を中心にすえて活動。82年以降は佐々木正利を常任指揮者に迎え、バッハのヨハネ、マタイ両受難曲、ミサ曲短調、クリスマス・オラトリオ、カンタータ等に加え、シュッツ、ヘンデル、モーツァルトなどの、いわゆる「古典」とされる作品から、近現代の無名に近い、しかし綺羅星の如き様々な作品を演奏している。2010年には盛岡バッハ・カンタータ・フェラインと共に、H. リリングの指揮のもとオーケストラ・アンサンブル金沢の仙台、盛岡公演でバッハのミサ曲短調を演奏し好評を博した。



ドイツ・レクイエム演奏会 鑑賞の手引き ～テキスト(歌詞)内容の関連をたどって～

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン コンサートマスター 佐々木 幹雄

死に際して私たちは「亡くなられた方が安らかでありますように」と願います。ラテン語で「安息を」を意味する「レクイエム」とはキリスト教において死者のために執り行われるミサの中で神に向かって歌われる歌(ミサ曲)の冒頭の歌詞^[注1]でもあります。キリストへの信仰をもつ人々はイエスによって死の支配から解放されており、死ぬことはキリストとともにいるようになることを意味します。キリスト＝神とともにあることの安息を願う歌、それが「レクイエム」です。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。」

これは『ヨハネによる福音書』の第3章16節です。神は独り子イエスをキリスト(救世主)としてこの世に送りその十字架上の死をもって万人を救いました。救いという神の愛を示したとも言えます。神が創造したこの世界はいかなる苦難に見舞われようと神の愛とともにある、というのがキリスト教の教えです。つまり、死後の安息を待たずしても現世に神の愛が満ちている、ということでもあります。

本日演奏する曲はいずれもドイツ語によるキリスト教音楽です。第1部では17世紀から18世紀のプロテスタント教会音楽から主にテキスト(歌詞)によって選ばれた6曲を演奏します。これらは皆、教会での礼拝に実際に用いられ、人々の教化を促した楽曲です。一方、第2部では19世紀の作曲家J.ブラームスによる《ドイツ・レクイエム》の全曲をピアノ2台の伴奏版で演奏します。工業化が始まり他国との戦争を経ながら統一へと向かう時代のドイツ^[注2]で、近代市民が集うコンサートのために作られた作品です。時代は異なるもののこの第1部と第2部の作品はテキストの内容の点で多くの関連もあります。歌詞対訳をご覧になりながらご鑑賞ください。

【第1部】

第1部では、宗教改革者であるM.ルター^[注3]から百年後に生まれ、ドイツ語による教会音楽を確立したH.シュッツ^[注4]によるモテット集「宗教的合唱曲集」^[注5]から3曲と、そしてさらに百年後に生まれたJ.S.バ

注1 「主よ、永遠の安息を彼らにお与えください」「Requiem aeternam dona eis, Domine」で始まるテキストをもつ。「死者のためのミサ曲」とも呼ばれる。

注2 1848年に三月革命が起こった後、1850年代から工業化が進展した。さらに1862年にはプロイセンの首相にビスマルクが就き、1864年対デンマーク戦争、1866年普墺戦争、1870年普仏戦争を経て1871年にドイツ帝国が発足する。

注3 マルティン・ルター(Martin Luther)、1483-1546。ザクセン地方のアイスレーベンに生まれる。贖宥状に疑問を呈したことで、キリスト教の宗教改革を行うことになる。ちなみに「プロテスタント」とは旧来の教会に対して「抗議する者」の意。

注4 ハインリッヒ・シュッツ(Heinrich Schütz)、1585-1672。チューリンゲン地方のケストリッツに生まれる。ヴェネツィアで音楽を学び、ドレスデンで選帝侯付宮廷楽長を務め、ドイツ語と音楽の一致を成し遂げ多くの声楽作品を作った。

注5 《宗教的合唱曲集》“Geistliche Chormusik” op. 11。29曲のモテット(SWV369-397)集。1648年にドレスデンで刊行された。

ッハ^[注6]による教会カンタータ^[注7]から2曲を演奏します。

1曲目《涙と共に種を撒く人は》(SWV378)は『詩篇』第126篇第5、6節の聖句をテキストとしてシュッツが作曲しました。「様々な労苦に耐えながら生きている人は大きな喜びを得るのだ」という希望を歌います。テンポや拍子やリズムや和音を言葉に応じて変化させることで意味を巧みに表現しています。このテキストは第2部で演奏する《ドイツ・レクイエム》の第1曲の中間部の歌詞としても使われています。

2曲目《今から後、主のもとに死ぬ人々は幸せである》(SWV391)は『ヨハネの黙示録』第14章第13節の天からのお告げを歌詞としています。「主に結ばれて死ぬ人は現世の労苦から解放され報われる」というテキストの通り、安らぎに満ちた音楽が展開します。このテキストと同じ聖句が《ドイツ・レクイエム》の最終曲の歌詞としてブラームスによって選ばれています。

3曲目《イエスを信じるもの、その人は裁かれません》(BWV68-5)^[注8]は『ヨハネによる福音書』第3章第18節を歌詞としています。その直前の第16、17節は次の言葉です。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。」

厳しい現世に生き労苦を抱える人々は、その死後への希望をも失いかねないでしょう。しかし神がイエスを地上に遣わしたことによって世は救われたのだ、と説くことによって人々に生きる希望が生まれます。そのことを「イエスを信じるものは裁かれません。」と力強く確信して歌います。

4曲目《これほどに神は世を愛しました》(SWV380)は前述の『ヨハネによる福音書』第3章第16節を歌詞としています。「これほどに」とは独り子イエスを地上に送った上に受難させたことを指しています。特に、独り子を信じる者は『一人も』滅びない、と強調しています。

5曲目《主よ、あなたの目は信仰を顧みます》(BWV102-1)は『エレミヤ書』第5章第3節、信仰心が無く回心しようとしないう厚顔な者を嘆くエレミヤの言葉を歌詞とし1726年にライプツィヒで演奏されたカンタータ^[注9]の冒頭の合唱曲です。「これほどに世を愛してくださっている神を頑なに拒む者、そのことに気づかない者が世に満ちている、悔い改めなさい」と見事なフーガ^[注10]を展開しながら歌われます。

以上の第1部はドイツ・プロテスタント教会が大切にする「信仰のみによって救われる」という教えをテーマとしています。

注6 ヨハン・ゼバスティアン・バッハ(Johann Sebastian Bach)、1685-1750。アイゼナハで生まれ、後半生はライプツィヒにて聖トマス教会のカントルをつとめ、多くの宗教曲を作った。

注7 「教会カンタータ」とは器楽伴奏の独唱や合唱で構成されている組曲で、ルター派教会の礼拝における「説教音楽」として作曲されたものの総称。

注8 カンタータ第68番。1725年(ライプツィヒ)の聖霊降臨節第2日用のカンタータで、全5曲から成る、その最終楽章。弦楽合奏と通奏低音の他にツィンク、トロンボーン、オーボエ、オーボエ・ダ・カッチャが入る比較的大きな編成の合唱曲。

注9 カンタータ第102番。1726年(ライプツィヒ)の三位一体後第10日曜日用のカンタータで、二部構成をとる大規模なものの第1曲。2つのオーボエと弦楽合奏、通奏低音が入る。

注10 「フーガ」とは模倣対位法に基づき、一つの声部に現れた旋律を他の声部が追いかけるように模倣する作曲様式。

【第2部】

第2部は、バッハからさらに150年ほど後に生まれたJ.ブラームス^[注11]による《ドイツ・レクイエム》(op.45)です。「レクイエム」と題名にありますが、カトリックのミサにおける《死者のためのミサ曲》とは異なり、ブラームス自身がルター訳のドイツ語聖書からテキストを選んで歌詞として作曲したものです。教会での礼拝に用いるために作曲されたのではなく、当時社会的な力をつけてきた近代市民が集うコンサートのために「作品」^[注12]として作られました。宗教的ではあるけれど教会音楽ではないという意味で、G.H.ヘンデルの《メサイア》^[注13]やF.J.ハイドンの《天地創造》^[注14]のような「オラトリオ」^[注15]のジャンルに含まれるものです。ですから死者のためというよりも、死を念頭におきつつ今を生きている人間の「苦悩」や「はかなさ」や「忍耐」に共感し、さらにそれらの先にある「慰め」や「報い」の確信を歌うといった内容をもっています。またブラームスの生死観も見て取れます。作曲の契機としてブラームスの作曲家としての才能を見出し世に紹介したR.シューマンの死^[注16]やブラームスの母親の死^[注17]が指摘されていますが、ブラームス自身が身近な人の死を経験することによって、人間の「生」というものをより豊かに捕らえなおそうとしたのではないかと私には思われます。

初演は3回にわたって行われました。初めは1867年ウィーンで第1、2、3楽章が^[注18]、翌年にはブレーメンで第5楽章以外の全ての曲が^[注19]、そしてさらに翌年にライプツィヒで全7楽章が^[注20]演奏されました。ブラームス34～36歳のことで、この大作《ドイツ・レクイエム》の成功によってブラームスは作曲家としての基盤を築いたと言われています。ちなみに、有名な交響曲第1番の初演(1876年)よりも数年前のことでした。また、ブラームスは1850年代からルネッサンス音楽及びシュッツやバッハをはじめとするバロック

注11 ヨハネス・ブラームス(Johannes Brahms)、1833-1897。ホルシュタイン地方のハンプルクに生まれる。同時代に活躍した作曲家は多いが、その生年はメンデルスゾーンが1809年、ショパンとシューマンが1810年、リストが1811年、ワーグナーとヴェルディが1813年と、ブラームスは20歳ほど年下にあたる。

注12 ブラームス自身が作品番号(opus)45をつけている。ちなみに1861年の作品番号41から1876年の作品番号68(交響曲第1番)までのうち4つ以外は全て独唱や重唱、合唱などの声楽曲である。

注13 ゲオルグ・フリードリヒ・ヘンデル(Georg Friedrich Handel)が1742年に初演したオラトリオ。救世主であるイエス＝キリストの降誕・受難・復活のドラマが展開される。

注14 フランツ・ヨーゼフ・ハイドン(Franz Joseph Haydn 1732-1809)が1798年に初演した天地創造やアダムとイヴの物語をテーマにしたオラトリオ。

注15 「オラトリオ」"oratorio"とは宗教的または道徳的性格を持つ長大で劇的な台本を独唱、合唱、管弦楽のために作曲した作品のこと。ジャンルとしては19世紀前半にアマチュア合唱運動の興隆や古楽復活の機運とともに人気が高まった。

注16 作曲家ロベルト・シューマン(Robert Alexander Schumann)はライプツィヒで『新音楽時報』という雑誌を創刊し、音楽批評の活動も行っていた。その雑誌にブラームスを「天才」として紹介した。1854年に投身自殺を図り、1856年に46歳で亡くなった。

注17 ヨハンナ・ヘンリーカ・クリスティアーネ(1789-1865)。素朴で豊かな心、揺るぎない信仰をもっており、社会道徳を忠実に守るタイプであったという。1865年に亡くなった。

注18 ウィーン楽友協会での初演は、ヘルベックという指揮者の下、第3楽章のティンパニーの連打が強すぎて、聴衆の不評を買った。

注19 ブレーメン大聖堂ではブラームス自身が指揮をして大成功を収めた。ちなみに日本ではこの年が明治元年。

注20 ライプツィヒのゲヴァントハウスではシューマンの良き理解者であるライネッケが全7楽章を指揮し、結果としてブラームスの名声が確立された。

音楽の研究を本格化させています^[注21]。《ドイツ・レクイエム》にはそれらの研究から得た成果が大いに生かされています。

第1曲では「苦悩(Leid)」は「慰め(tröstet)」をもって、「涙(Tränen)」は「喜び(Freuden)」をもって報われる、と歌われます。テーマは「幸せである(Selig sind.)」。冒頭には「ややゆっくりと、そして表情を込めて」と曲想が指示されています。

第2曲の前半では人のはかなさや空しさとそれに耐える人を優しく見守るブラームスの音楽が示されます。後半では「神の変わることをない生きた言葉によって新たに生まれる人々」^[注22]の喜びが謳いあげられます。

第3曲ではバリトン独唱が登場し合唱も含めて皆一人称の語りとなります。冒頭から人生の空しさを前にして悩む人の言葉が語られます。しかし神を慰めとし神に望みをかけることの喜びに気づくことにより、後半では神の手中にある者の確信が持続低音^[注23]上で展開するフーガによって力強く宣言されます。

第4曲は変ホ長調の四分の三拍子で、第3曲で至った主なる神とともにいることの安らぎに満ちた牧歌的な音楽が全体を貫いています。

第5曲は前述したように最後に加えられた楽曲です。ソプラノ独唱が登場し、「悲しむ者は慰めを見出す」と慈愛に満ちて歌います。それに呼応して合唱は「その慰めは母が子を慰めるようだ」と優しく包み込みます。

第6曲は一転して不安さをにじませながら現世に永遠の居場所を持たないことを歌う合唱から始まります。そこにバリトン独唱が復活の奥義を聴き手に向かって語り始めます。「私たちは変えられる」「死に打ち勝って復活する」と合唱がその時を描写しながら歌い、死に対する勝利を宣言します。最後は壮大なフーガによって主を賛美し、ドラマチックな楽章を終えます。

第7曲では、これまでの歌によって新しくなった死の意味が示されます。死は現世から切り離される悲しいことであったり単に現世の労苦からの開放されることであったりするのではなく、「人が労苦の下にありながら現世で成した功績が報われつつ、望みをかけた主のもとに安らぐことなのだ」という確信です。

ブラームスは《ドイツ・レクイエム》の中で「イエス」や「キリスト」の語を1回も用いませんでした。それはブラームス自身の「私は<ドイツの>という語を喜んで省いて、単に<人間の>と書き替えてもよい」というタイトルに関する言葉から分かるように、イエスの死とそれによる救済というキリスト教の教義よりも、人間への深い慈愛や慰めをテーマとしていたからと考えられます。人間への暖かいまなざし、生きることへの新しい意味づけをもたらすブラームスの《ドイツ・レクイエム》を、ごゆっくりお楽しみ下さい。

2013/10/21

注21 ブラームスはバッハ研究家のシュビッタ、ベートーヴェン研究のノッテボーム、ハイドン研究のポール、ヘンデル研究のクリュサンダーなど多くの音楽学者と交流があった。また、1863年から1年ほどつとめたウィーンのジング・アカデミーの指揮者としてルネサンスやバロックの合唱曲をプログラムに取り上げたりもしていた。

注22 『ペトロの手紙 一』の第1章第22、23節には次のようにあります。「22 あなたがたは、真理を受け入れて、魂を清め、偽りのない兄弟愛を抱くようになったのですから、清い心で深く愛し合いなさい。23 あなたがたは、朽ちる種からではなく、朽ちない種から、すなわち、神の変わることをない生きた言葉によって新に生まれたのです。24 こう言われているからです。『人は皆、草のようで…』」

注23 持続低音(Olgerpunkt)とは、低音の同一音を長く持続させる作曲技法で、主音や属音で用いられることが多い。この曲では全208小節中、後半の36小節にわたって主音である音名D(二)の音が鳴っている。

対訳

Heinrich Schütz aus „Geistliche Chormusik“

SWV 378

Die mit Tränen säen,
werden mit Freuden ernten.
Sie gehen hin und weinen und tragen edlen Samen
und kommen mit Freuden und bringen ihre Garben.

SWV 391

Selig sind die Toten,
die in dem Herrn sterben, von nun an.
Ja, der Geist spricht,
daß sie ruhen von ihrer Arbeit;
denn ihre Werke folgen ihnen nach.

SWV 380

Also hat Gott die Welt geliebt,
daß er seinen eingebornen Sohn gab,
auf daß alle die an ihn galuben,
nicht verloren werden,
sondern das ewige Leben haben.

Johan Sebastian Bach aus Kantate
„Also hat Gott die Welt geliebt“, BWV 68

5. Chor

Wer an ihn gläubet, der wird nicht gerichtet;
wer aber nicht gläubet, der ist schon gerichtet;
denn er gläubet nicht
an den Namen des eingebornen Sohnes Gottes.

aus Kantate „Herr, deine Augen sehen
nach dem Glauben!“, BWV 102

1. Chor

Herr, deine Augen sehen nach dem Glauben!
Du schlägest sie, aber sie fühlen's nicht;
du plagest sie, aber sie bessern sich nicht.
Sie haben ein härter Angesicht denn ein Fels
und wollen sich nicht bekehren.

第1 ステージ

H.シュッツ 『宗教的合唱曲集』より

涙と共に種を撒く人は、
喜びと共に収穫するだろう。
出て行き、涙を流し、貴重な種を持って行く人々は
喜びと共に束を抱えて戻ってくる。
(『詩篇』126:5,6)

今から後、
主のもとに死ぬ人々は幸せである。
「そうだ」と聖霊も語る、
「彼らは労苦を解かれて憩い、
彼らの成したことも報われるのだから」
(『ヨハネによる黙示録』14:13)

このように神はこの世界を愛してくれました
神は自らの独り子を与え、
彼を信じる者は全て
失われることなく、
永遠の命を得られるのです。
(『ヨハネによる福音書』3:16)

J.S.バッハ カンタータ
『このように神はこの世界を愛してくれました』より

5. 合唱
イエスを信じる者、その人は裁かれません。
イエスを信じない者、その人はすでに裁かれています。
なぜなら その人が信じていないのは
神の独り子の名なのですから。
(『ヨハネによる福音書』3:18)

カンタータ
『主よ、あなたの目は信仰を顧みます!』より

1. 合唱
主よ、あなたの目は信仰を顧みます!
あなたが打っても、彼らは感じず、
あなたが苦しめても、彼らは改めません。
彼らはその顔を岩よりも固くして
立ち返ろうとしないのです。(『エレミア書』5:3)

Johannes Brahms
Ein deutsches Requiem Op. 45

1.
Seilig sind, die da Leid tragen,
denn sie sollen getröstet werden.

Die mit Tränen säen,
werden mit Freuden ernten.
Sie gehen hin und weinen und tragen edlen Samen
und kommen mit Freuden und bringen ihre Garben.

2.
Denn alles Fleisch es ist wie Gras
und alle Herrlichkeit des Menschen wie des Grases Blumen.
Das Gras ist verdorret und die Blume abgefallen.

So seid nun geduldig, lieben Brüder,
bis auf die Zukunft des Herrn.
Siehe, ein Ackermann wartet
auf die köstliche Frucht der Erde und ist geduldig darüber,
bis er empfahe den Morgenregen und Abendregen.

Denn alles Fleisch es ist wie Gras
und alle Herrlichkeit des Menschen wie des Grases Blumen.
Das Gras ist verdorret und die Blume abgefallen.
Aber des Herrn Wort bleibet in Ewigkeit.

Die Erlöseten des Herrn werden wieder kommen
und gen Zion kommen mit Jauchzen;
ewige Freude wird über ihrem Haupte sein,
Freude und Wonne werden sie ergreifen,
und Schmerz und Seufzen wird weg müssen.

第2 ステージ

J. ブラームス
ドイツ・レクイエム

1.
苦悩を背負う人々は幸せである、
彼らは慰められるのだから。
(『マタイによる福音書』5:4)

涙と共に種を撒く人は、
喜びと共に収穫するだろう。
出て行き、涙を流し、貴重な種を持って行く人々は
喜びと共に束を抱えて戻って来る。
(『詩篇』126:5,6)

2.
肉ある者は皆 草のようで、
人間のあらゆる栄華は草の花のようだ。
草は枯れ、花は散ってしまう。
(『ペテロの手紙1』1:24)

今は耐え忍びなさい、親愛なる兄弟たちよ、
主の到来の時まで。
見よ、農夫は待っている
大地の貴い実りを、耐え忍びながら
朝の雨と夕べの雨を迎えるまで。
(『ヤコブの手紙』5:7)

肉ある者は皆 草のようで、
人間のあらゆる栄華は草の花のようだ。
草は枯れ、花は散ってしまう。
だが主の言葉は永遠にあり続ける。
(『ペテロの手紙1』1:24)

主に救われた人々は再び戻り
シオンに歓声と共に帰って来る。
永遠の喜びが彼らの頭上にあり、
喜びと歓喜を彼らは得て、
苦痛と悲嘆は去ってゆくのだ。
(『イザヤ書』35:10)

3.

Herr, lehre doch mich,
daß ein Ende mit mir haben muß,
und mein Leben ein Ziel hat,
und ich davon muß.
Siehe, meine Tage sind einer Hand breit vor dir,
und mein Leben ist wie nichts vor dir.

Ach, wie gar nichts sind alle Menschen,
die doch so sicher leben.
Sie gehe daher wie ein Schemen,
und machen ihnen viel vergebliche Unruhe,
sie sammeln und wissen nicht, wer es kriegen wird.

Nun Herr, wes soll ich mich trösten?
Ich hoffe auf dich.

Der Gerechten Seelen sind in Gottes Hand,
und keine Qual rühret sie an.

4.

Wie lieblich sind deine Wohnungen, Herr Zebaoth!
Meine Seele verlangt und sehnet sich
nach den Vorhöfen des Herrn;
mein Leib und Seele freuen sich in dem lebendigen Gott.

Wohl denen, die in deinem Hause wohnen,
die loben dich immerdar.

5.

Ihr habt nun Traurigkeit,
aber ich will euch wiedersehen
und euer Herz soll sich freuen
und euer Freude soll niemand von euch nehmen.

Sehet mich an:
Ich habe eine kleine Zeit
Mühe und Arbeit gehabt
und habe großen Trost funden.

Ich will euch trösten,
wie einen seine Mutter tröstet.

3.

主よ、私に教えてください、
私に必ず終わりがあるという事を、
私の命に限りがあり、
それが避けられないという事を。
見てください、私の日々はあなたには一握りの長さ、
私の人生はあなたには無に等しいものです。

ああ、すべての人間は無に等しいもの、
たとえ安らかな人生を送っていても。
人は影のように消え去るもの、
無駄に慌ただしく生き、
集め蓄えても誰がそれを受け取るのか知りません。

では主よ、何を私は慰めにすれば良いのでしょうか?
私はあなたに望みをかけます。 (『詩篇』39:4-7)

正しい者の魂は神の手の内にあり、
どんな苦悩も彼らを襲うことはない。
(『ソロモンの知恵』3:1)

4.

あなたの住まいは何と素敵なのでしょう、万軍の主よ!
私の魂は望み憧れています
主の前庭に。
私の体も魂も生ける神に喜んでいます。
(『詩篇』84:1-2)

幸いです、あなたの家の住む人々、
あなたをいつまでも賛美する人々は。
(『詩篇』84:4)

5.

あなたたちには今 悲しみがある、
しかし私はあなたたちに再会し
あなたたちの心は喜ぶだろう、
そしてあなたたちの喜びを取り上げる事は誰にもできない。
(『ヨハネによる福音書』16:22)

私を見てください、
私はほんの少しの間
労苦と労働をしただけで
大きな慰めを見出しました。
(『ベン・シラの知恵』51:27)

私はあなたたちを慰める、
独り子を母が慰めるように。 (『イザヤ書』66:13)

6.

Denn wir haben hie keine bleibende Statt,
sondern die zukünftige suchen wir.

Siehe, ich sage euch ein Geheimnis:
Wir werden nicht alle entschlafen,
wir werden aber alle verwandelt werden;
und dasselbige plötzlich in einem Augenblick
zu der Zeit der letzten Posaune.
Denn es wird die Posaune schallen
und die Toten werden auferstehen unverweslich,
und wir werden verwandelt werden.

Dann wird erfüllet werden das Wort, das geschrieben steht:
Der Tod ist verschlungen in den Sieg.
Tod, wo ist dein Stachel?
Hölle, wo ist dein Sieg?

Herr, du bist würdig zu nehmen Preis und Ehre und Kraft,
denn du hast alle Dinge erschaffen,
und durch deinen Willen haben sie das Wesen
und sind geschaffen.

7.

Selig sind die Toten,
die in dem Herrn sterben, von nun an.
Ja, der Geist spricht,
daß sie ruhen von ihrer Arbeit;
denn ihre Werke folgen ihnen nach.

6.

私たちはここでは永遠の居場所を持たないのですから、
それを未来に探し求めるのです。
(『ヘブライ人への手紙』13:14)

見よ、私はあなたたちに神秘を語ろう。
私たちは皆 眠り続けることは無く、
皆 変えられる。
それは突然、一瞬にして、
最後のラッパと共に起こる。
そのラッパが響く時
死者たちは朽ちることの無い者として甦り、
私たちは変えられる。

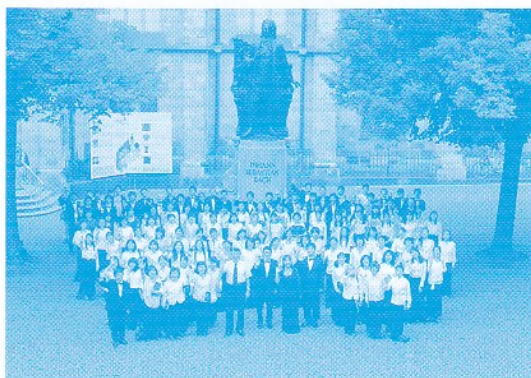
そして聖書に書かれた言葉が成就する—
「死は勝利に飲み込まれた。
死よ、おまえの棘はどこに?
地獄よ、おまえの勝利はどこに?」
(『コリント人への手紙』15:51-55)

主よ、あなたは賞賛と栄光と力を受けるのに相応しい方、
あなたは万物を創ったのですから、
あなたの意思によって万物は存在し、
創られるのですから。
(『ヨハネによる黙示録』4:11)

7.

今から後、
主のもとに死ぬ人々は幸せである。
「そうだ」と聖霊も語る、
「彼らは労苦を解かれて憩い、
彼らの成したことも報われるのだから」
(『ヨハネによる黙示録』14:13)

(対訳：仙台宗教音楽合唱団 若林敦盛)



2013.8.7 聖トマス教会バッハの象

ごあいさつ

みなさま、こんにちは。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン指揮者の佐々木正利です。1977年の発足以来、ドイツに留学していた2年半を除いてずっと指揮者を務めさせていただいております。さすればもう35年も指揮をしていることになり、人生の優に半分以上をフェラインのみなさまとともに歩んで来たことになります。この年月を、仮に「フェライン歴」と称しますと、わたしと同じフェライン歴を持っている会員は、アルトの桐原絹子さんとソプラノの斎藤純子さんの二人だけとなりました。すなわち、わたしたちフェラインには延べどのくらいの仲間が在籍していたことになるのか、数えたことはありませんが実に多くの仲間が連なり、また巣立って行ったことになります。しかし、人代わっても、脈々と続くフェラインの音楽は変わらずに受け継がれています。これこそがわたしたちの誇りであり、また財産なのです。

フェラインはドイツ語で、“Verein”、すなわち「会」とか「クラブ」「団体」という意味で、発足当初は「バッハのカンタータを歌う会」という名称で活動し始めましたから、現在の名称に変更する際、“Chor”コア（合唱団）ではなくフェラインという名にしたというわけです。しかし、本来のドイツ語の Verein の発音は、下線部の -r と e- はリエゾン（liaison：フランス語における連声の一種で、語を単独では読む場合には発音されない語末の子音字が、直後に母音が続く場合に発音される現象を指し、しばしば連音とも訳されます）しませんので、正しくは「フェアアイン」もしくは「フェルアイン」と発音されるべきであります。とは言っても我が国では、かの有名な「ウィーン楽友協会」（Wiener Musikverein）を「ヴィーナー・ムジークフェライン」と呼称している現状がありますので、「カンタータ・フェライン」でも、まあいいか、とした記憶があります。

このように、当初はバッハのカンタータを歌い、研究し、楽しむ会として発足したのですが、わたしが、ドイツ留学から岩手大学に奉職するために盛岡に帰って来た1982年頃より、独自の演奏会をたびたび持てるようになって、ベートーヴェンが“Bach war kein Bach, sondern ein Meer.”「バッハは小川にはあらず、大海である」と言ったように、また“Alle Schulen fließen in Bach, und alle Schulen werden von Bach geschaffen”「すべての流派はバッハに注ぎ、すべての流派はバッハから生まれる」ともよく言われているように、徐々にバッハ以外の曲にもチャレンジするようになったのでした。そしてついには、ベートーヴェンの第九（国内ではクルト・マズア指揮ロンドン交響楽団やダン・エッティンガー指揮東京フィルハーモニー交響楽団、ドイツではゲアノート・シュマールフス指揮北西ドイツ交響楽団と共演）や、マーラーの交響曲第2番「復活」（国内では飯森範親指揮東京交響楽団、台湾ではゲアノート・シュマールフス指揮エバー交響楽団と共演）などをも演奏することになりました。

わたしは、フェライン発足当時は東京藝大大学院の博士課程に在学していましたので（同時に、横浜の浅野高等学校の教諭でもあり、またすでに声楽家としてもデビューしていましたが）、3年間ほどは月に1回、東京から盛岡通いをしていました。毎週火曜日の定期練習日は、現盛岡大学教授の飯島隆さんが下振りをし、わたしは土曜の朝東京を発って帰盛し、その日の夜と翌日の午後と2度に亘りレッスンをし、練習後会員（フェラインは「会」なので団員とは言わず会員と言う伝統があります）のみなさんと懇親会をし（たいていはバスセンター近くの「こみや寿司」で行っていました）、月曜朝の出勤に備えて夜行寝台で帰京してい

ました。しかしながら、やはり指揮者は地元で常駐する方が良いと心底思っていたのは、前段のごとく、盛岡に居を構えるようになってからです。

そうこうしているうちに、思いがけず発展していったフェラインの音楽を、わたしは第二の故郷であるドイツで試したいと思うようになりました。本場ドイツで、わたしたちの奏でるバッハが、シュッツがどのように評価されるか、それを考えただけでワクワクドキドキものでしたが、こうした夢は盛岡に帰ってから4年後の1986年に実を結ぶことになります。在独時代に知り合って、何回かソロをさせていただいたオルデンブルクの贖罪教会のカントーリン（Kantorin：女性の教会音楽監督）、ブラウン広瀬美也子さんから招きを受け、また藝大時代の同級生ヴァイオリニスト、石黒章君が所属していたデュイスブルグ交響楽団の協力もあって、第1回ドイツ演奏旅行が実現したのでした。出し物はヘンデルのオラトリオ『メサイア』（ドイツ語版）、その他でしたが、わたしは指揮とソロ両方を担いました。このときの特筆すべきトピックは、オルデンブルクやフリーゾイテで行ったわたしたちの演奏の評判がすこぶる良く、その噂が飛び火して、最終演奏地デュッセルドルフの演奏会場には何とNHKボン支局が取材に訪れ、ゲネプロや本番の様相を収録し、日本での翌朝の情報番組（海外特派員便り）で十数分に亘って全国放送されたのです。これでわたしたちの名は、一挙に全国区となりました。

それに気を良くしたからではありませんが、それから5年後の1990～91年、つまり暮れから正月にかけての約10日間、第2回目のドイツ演奏旅行を敢行します。このときのターゲットは、わたしの母校デットモルト北西ドイツ音楽大学で演奏し、お世話になった恩師に恩返しをすることでした。そのころのわたしはまだまだ十分に若かったですし（40歳直前のバリバリ現役）、コンサートマスターの小原一穂君もピチピチしていました。またコンサートミストレスの小川暁美さんなどはまだ大学の低学年ではなかったかと思います。それほどまでにエネルギッシュなメンバーが揃っていましたから、取り上げたプログラムもそれこそ意欲的、A-プロとB-プロの二つを用意し、バッハの「クリスマス・オラトリオ」をはじめ、バッハの「モテット」、シュッツの「音楽による葬送曲」やブックステフデの「マニフィカト」等々、ほんとうによくやったものだと言葉が足りず感心してしまいます。そのときの現地の新聞評を何通か以下にご紹介しておきましょう。

エクスタータル・アルメーナ教会（‘Unsere Lippische Heimat’ 紙）

アルメーナ教会の新年のお客様は日本の合唱団

一教会に満ちるドイツ語の響き

「教会生活における至福の時」、牧師ベルンハルト・グルントマンは、元日の午後に行われた『教会音楽合唱団・盛岡&仙台』の演奏会をこのように表現した。1991年の残りの364日を考えると、おそらく困難の多い日々であろうが、この演奏会はまぎれもなくひとつのメッセージであった。なぜなら、120人の歌い手たちが、1時間半のプログラムのなかで、たくさんの思い出を伝えてくれたからである。

バート・ザルツウーフェン、コンサート・ホールでの演奏会（‘Lippische Landschaft’ 紙）

内面化されたドイツ文化の精神

一日本の合唱団がバッハからブックステフデまでの偉大な音楽を完全に自分たちのものにした

ザルツウーフェンのホールにおいて、このように美しく、このように完全で、このように印象ぶかく演奏された合唱音楽は、いまだかつてなかった。この合唱団は、この偉大なる音楽を完璧に歌いこなし、モテット音楽の精神を完全に表現し、異文化の中で育った外国人たちが歌っているとは、どうしても信じられないほどであった。

デットモルトにおける行事と演奏会(‘Lippe Aktuell’紙)

日本の合唱団、2日間にわたるデットモルト滞在

一市庁舎訪問からバッハ演奏までの記録

すばらしい!「小都市デットモルト」が、リッペ郡の文化の中心として輝いた。新年の第1週に、二つの国際的イベントが催された。『教会音楽合唱団・盛岡&仙台』が演奏会(シュヴァーレンベルク、アルメーナ、バート・ザルツウーフェンでも行われた)と「日本の夕べ」が開催されたのである。デットモルトでの演奏会の出しものは、バッハのクリスマス・オラトリオ後半部であった。一方、「日本の夕べ」では、この極東からの客人たちは、彼らの習俗の一端を私たちに見せてくれたのであった。ケルンに次ぐドイツ第二の音楽大学が二日間は日本人のものであった。日本の文化団体とデットモルト音大との友好の絆は、これからも実り豊かな伝統となるだろう、とはシュヌア学長の弁である。

ヴァールブルク・聖マリア教会演奏会(‘Warburger Land Lokalredaktion’紙)

日本の合唱団とドイツのオーケストラ/クリスマス・オラトリオの見事な演奏

旧市街聖マリア教会にて行われたバッハのクリスマス・オラトリオBWV 248第2部の演奏は、真に聴衆をひきつけるものであった。クリストフ・ボッペン指揮のもと、仙台・盛岡オラトリオコア、デットモルト室内オーケストラ、そして独唱に岡崎順子(ソプラノ)、永島陽子(アルト)、佐々木正利(テノール)、今仲幸雄(バス)といった面々が揃った。この芸術家たちは素晴らしい演奏のみならず、日本人とドイツ人による合同演奏の成功例を提供してくれた。また演奏会の期日が顕現節であり、その日にクリスマス・オラトリオのIVからVIをおいたのは最適の選択であったといえるだろう。

合唱はその100人ほどの多勢さによって視覚的にも深い感銘を与え、また、声の均質さ、明瞭で繊細かつ精巧な声の訓練、および明瞭な発音によって聴衆を魅了した。特に注目すべき点は、この多勢さにもかかわらず合唱が決して圧倒することなく、小ぶりなオーケストラあるいは独唱がほど良い気分させてくれたということである。この音楽的な合唱の育成は、合唱の練習指揮者として責任を負った佐々木正利によるものである。

佐々木正利は傑出したテノール歌手としても実力を示した。ヨーロッパではあまり知られていないが、彼の故郷である日本では優れたオラトリオ歌手のひとりとみなされている(そしてそれは全くもって正しい)。印象深く、ドラマチックに、しかし芝居がかかることなく、彼はエヴァンゲリストのレチタティーヴォを形づくっている。彼の高音域でのとても温かい、響き渡る声には承服させられ、テノール歌手の中でも名人芸といえるメリスマをもっている。他のソリストの魅力も少なくない。今回のソリストは4人共、デットモルトの声楽教育学者ヘルムート・クレッチマル教授の門下生である。

デットモルト室内オーケストラも均整の取れた響きでその優れたところを呈示した。こまやかなニュアンスをもつ、洗練されたアリアの伴奏であった。オーケストラと合唱が溶け合い、響きが一体となっていた。特に器楽のソロ(管楽器のパートはデットモルト音楽大学の教授らが担当していた)が抜きん出ている。また、厚みのある表現と、それでいてしつこさがない通奏低音部であった。そしてクリストフ・ボッペン氏がこのものすごい音の組織とソリストの性格とを彼の推進力によって理解し、心を込めた指揮で全体を一つにまとめあげたのである。

さて話は変わりますが、あの忌まわしい大震災から2年8ヶ月が過ぎようとしています。しかし時がどれほど経っても、いっこうに復興の兆しはなく、傷ついた人々のこころもいっこうに癒されていません。そうした人々にくらべて、わたしたち盛岡の人間は、それぞれの思いや悼みはあろうものの被害的にはごくごく些少のものだったと思います。されど、当時を思い起こしてみれば、あまりの痛手にいつ合唱が再開できる日が来るのだろうか、このままずっと歌舞音曲の類は御法度となるのではないかと、などと気をめぐらし、わたしたちとしてその落ち込みは相当ひどいものであったこと、その記憶がふつふつとよみがえります。思えば、震災2ヶ月半後には、久方ぶりのドイツ演奏旅行に出掛ける予定でした。しかし、当時は到底そんな気にはまったくなれず、せっせと準備を整えてくれていた現地のスタッフを裏切ることになってしまったので

す。それにもかかわらず、ドイツの受け入れ合唱団（コレギウム・ヴォカーレ、ギュンツブルク）は、わたしたちの代わりに演奏してくださり、その売り上げと募金によって集まった少なからぬ額の義捐金を、つよい励ましと慰めのメッセージとともにわたしたちに送ってくださったのでした。それによって、わたしたちは再び勇気づけられ、わたしたちができることをやっていこう、「起きてしまった過去は変えられないがこれからの未来なら変えられる」（NHKの大河ドラマ『八重の桜』のなかで、八重がみねに言ったことば）とばかり、歌うことを再開したのでした。その第一歩が2011年6月19日に行われた『チャリティーコンサート ～ 東日本大震災の犠牲者に捧ぐ ～ モーツァルト・レクイエム演奏会』として結実したのでしたが、その演奏会のプログラムに寄稿したわたしのごあいさつの抜き書きを以下に掲げます。

（前略）今回の地震や津波に被災されたみなさんには掛けられることばもありません。巷ではいま、わたしたちは何をすべきか、わたしたちに何ができるか、みなで考えよう、といったフレーズが賑々しく語られています。とうのわたしには、音楽しか、歌しかないからなあとは思っても、果たして、わたしたちの歌声がみなさんの生きる希望にどのようなつながっていくのか、明日へがんばる励ましのメッセージになれるのか、とんと自信がありません。そのような状況下、合唱団のなかから自然発生的に、被災された犠牲者の魂のために祈るコンサートをやりましょうといった機運が高まってきたのでした。実はわたしたちフェラインは、もともと5月の初めには、ドイツはローテンブルグ音楽祭で、モーツァルトのレクイエムを演奏する予定になっていましたので（大震災の影響で渡独できなくなりました）、亡くなった方の魂の救済のために、レクイエムを歌って神さまに祈ろうと思いました。

ドイツで、モーツァルトのレクイエムを指揮して下さることになっていた盟友 G. シュマルルスさん、来年3月、氏が音楽監督を務める台湾のエバー交響楽団とマーラーの交響曲第2番「復活」を共演して追悼しようと励まして下さり、また昨年12月に東京フィルハーモニー交響楽団との第九を指揮して下さった D. エッティンガーさんからも温かい励ましのメッセージを載いています（そのステージに一緒に乗った岩手大学教育学部附属小学校合唱部は、本年8月、東京オペラシティで行われる東京フィルの第九に、東京オペラシンガーズ、東京少年少女合唱隊と共に乗ります）。こうした励まし（いや本当はこちらが励まされなければならないのですが）に支えられて、しっかり演奏しようと団員とスクラムを組み直すと共に、被災された田老、釜石、大船渡、陸前高田の仲間たちに我々の心をお伝えしたく、何人の方でも聴きにきて下さいとメッセージを発信しました。もし会場にお越しになられていましたならば、心をひとつにして犠牲になられた方々の魂のために、今一度お祈りしましょう。（後略）

その後わたしたちは、2012年2月12日に『35周年記念演奏会～イタリア・バロックの煌めき』、3月20日に台湾で『The Memorial Concert for Japan's March 11 Earthquake & Tsunami』、2013年1月13日に『バッハからの贈り物 ～ 珠玉のカンタータ Vol.2 ～』と演奏を繰り広げ、そしてついに今年の8月上旬、積年の夢かない、再びドイツの地へと演奏旅行を挙げてきたのでした。ドイツでは、バッハの聖地ライプツィヒ聖トマス教会にて、ダーヴィッド・ティム指揮ライプツィヒ・パウリナーアンサンブルとカンタータ第46番、第102番、第105番を共演できたのははじめ、ローテンブルクやロストックではずばり『Auferstehung（復活）』の演奏会タイトルのもと、シュッツの宗教合唱曲集やカンタータ第68番、ブラームスのドイツ・レクイエム抜粋（第1曲と第7曲のみ）を演奏し、ローテンブルクでは、震災時にお世話いただいた各位に対してご恩返しをし、またロストックでは急遽ベルリンから駆けつけてくださった中根猛駐独日本大使のご臨席を仰ぎ、力強く復興への祈念を歌い上げて参りました。

本日の演奏会では、フェラインの姉妹団体である仙台宗教音楽合唱団の応援を得て、それぞれに仲間や身内を失い大きな悲しみのなかにあってがんばって歌いつないできたものたちが、ドイツ演奏旅行のご報告と、そして何よりもまだまだ震災復興道半ばで、被災者の汗と涙の道とともに歩み、それをわたしたちが世界に

示せるのは歌しかないという思いから、こころを尽くし、ねがいを尽くして、わたしたちの音楽のありったけをお届けしたいと思っています。

最後に、最近入ったうれしいニュースを二題お伝えして拙稿を閉じましょう。

ひとつは（多分、代表のごあいさつでも触れられると思いますが）、この演奏会が、盛岡（フェライン）と仙台（宗音）の合唱団が、震災後も練習を続けて、歌う仲間の絆の尊さを胸に合同で演奏会を開催することが評価され、公益財団法人サントリー芸術財団が運営する「ウィーン・フィル&サントリー音楽復興基金」の助成事業、第2回「ウィーン・フィル&サントリー音楽復興祈念賞」を受賞したことです。ほんとうにがんばって歌いつないできてよかったと、心底思います。

いまひとつは、震災後もこころをひとつにして真剣に歌に取り組んできた岩手大学教育学部附属小学校が、NHK全国学校音楽コンクールで2011年、2012年と東北を連覇し全国大会に駒を進めたものの、すんでのところに入賞を逃してきましたが、東北大会3連覇を果たした今年、この9月に行われた全国大会で、見事銀賞（全国第2位）に輝いたことです。わたしも一昨年まで校長を務め、こどもたちの音楽性向上に一役を担ってきましたが、校長職を退いた後も、世界に通じるわたしたちの音楽が認められないわけではないと、信念を持って続けて関わって参りました。というのも、附属小学校を指導する教員陣、すなわち指揮を担当した小川暁美さん（フェラインのコンサートミストレス）やピアノを担当した小野寺洋子さんをはじめ、菊地明日香さんや磯沼佳世さんらみんながフェラインの会員であり、日頃からいっしょに音楽している仲間なものですから、附属小学校が認められるということはフェラインの音楽活動が認められるということに相通じると思っていますからです。その意味では、わたしにとっては岩手大学合唱団や本日共演する仙台宗教音楽合唱団、そして東北大学混声合唱団等々、いわゆる佐々木ファミリー（手前勝手にそう呼びたいと思いました）が認められるのは、これに勝る喜びはないと言っても過言ではありません（そうした仲間が山形、金沢、富山、東京、横浜、大阪、岡山などに広がっていつているのも、ほんとうにうれしいことです）。

そういえば、先々月の訪独演奏旅行での合唱団の全体名称は「SASAKI-KANTOREI, JAPAN（佐々木聖歌隊、日本）」でしたが、そのときも、ライブツィヒ聖トマス教会でのリハーサルでのこと、指揮者のティムさんがわたしたちの歌声を聴いて（通訳していたわたしも確かにそうだったのですが）、教会最前方下のアルタール（祭壇）にあるバッハの墓を指して、「今の歌声はあそこに眠るバッハも喜んでいるよ」と仰られたのを思い出しました。このことば、世界中のバッハ演奏家が憧れ望む、最高の賛辞だとひとりごちたものです。

音楽の本質は、ひとりごちがオーソライズされ、共有されるようになったとき、その魅力が最大限に発揮されます。わたしたちは、おわりのない魅力への永劫の旅を一步一步あゆみます。シュッツからバッハへ、バッハからモーツァルトへ、モーツァルトからベートーヴェンへ、ベートーヴェンからブラームスへ、ブラームスからマーラーへ、マーラーから現代へ、時の旅人が見聞きしたことを後世に伝えるために。真剣に、真摯に、誠実に。それがフェラインの仲間たちです。みなさま、どうぞ今後ともフェラインを温かくお見守りください。そして、ひとりでも多くの方と同じ音楽体験を共有したいと考えています。フェラインはどなたでも仲間になれます。どうぞ遠慮なくドアをノックしてください。会員みんなが待っています。

（盛岡バッハ・カンタータ・フェライン指揮者 佐々木正利）

盛岡バッハ・カンタータ・フェラインの歴史

1977年に結成以来「J. S. バッハの教会カンタータの研究と演奏を通して音楽芸術を追求する」ことを目的として、これまで、36年間活動が続けてきました。主な演奏会と演奏旅行の経過は以下のとおりです。

1977年

- 2月27日 「カンタータを歌う会」として発足
- 6月28日 「盛岡バッハ・カンタータ・フェライン」に改称

1978年

- 2月26日 「バッハコンツェルト」 カンタータ 45 番、147 番 指揮：小林道夫（芸大と共演）

1979年

- 10月6日 「BACH ABEND」 カンタータ 158 番、131 番 指揮：小林道夫

1980年

- 2月27日 「バッハの夕べ」 カンタータ 80 番 指揮：小林道夫（芸大と共演）
- 12月22日 この年より「チャリティー・コンサート」を、盛岡市内のバロック音楽愛好家グループと共催（～1997）

1981年

- 7月4日 「BACH ABEND」 カンタータ 195 番、182 番 指揮：小林道夫

1982年

- 11月22日 「バッハの夕べ」 カンタータ 158 番、4 番 指揮：佐々木正利

1985年

- 3月16, 17日 J. S. バッハ生誕 300 年記念演奏会「ヨハネ受難曲」 指揮：佐々木正利
（仙台宗教音楽合唱団と合同演奏）
- 11月3日 仙台北教会宗教音楽の夕べ「メサイア」 メサイア（G. F. ヘンデル） 指揮：佐々木正利
- 11月29日 G. F. ヘンデル生誕 300 年記念演奏会「メサイア」（G. F. ヘンデル） 指揮：佐々木正利

1986年

- 4月11日 「宗教音楽の夕べ」 ドイツ・レクイエム（H. シュッツ）ほか 指揮：佐々木正利
- 4月～5月 第1回ドイツ演奏旅行 ドイツ・レクイエム（H. シュッツ）ほか 指揮：佐々木正利
- 7月11日 「東京ゾリステン演奏会」共演 スターバト・マーテル（ペルゴレージ） 指揮：赤松 安

1987年

- 3月28日 創立10周年記念演奏会「カンタータの夕べ」
カンタータ 34 番、70 番、102 番ほか 指揮：佐々木正利
- 11月27日 ムシカ・デラルテ・トウキョウ演奏会「バロック音楽の夕べ」（主催）

1988年

- 3月12, 13日 仙台宗教音楽合唱団との合同演奏会「ミサ曲短調」 指揮：佐々木正利
- 9月17日 「今仲幸雄バリトンリサイタル」（主催）
- 11月17日 「ミヒャエル・ショッパバリトンリサイタル」（主催）

1989年

- 4月24日 「二重合唱の夕べ」 モテット 2 番、5 番（J. S. バッハ）ほか 指揮：佐々木正利

1990年

- 3月10, 11日 盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団合同演奏会
クリスマス・オラトリオ 4～6 部、ミサ曲へ長調（J. S. バッハ） 指揮：佐々木正利
- 10月1日 「アグネス・ギーベル 佐々木正利 ジョイントリサイタル」（主催）

1990 年

12 月～翌 1 月 第 2 回ドイツ演奏旅行 クリスマス・オラトリオほか 指揮：C. ポッペン、佐々木正利

1991 年

3 月 10 日 ドイツ演奏旅行帰国演奏会

モテット 1, 2 番(J. S. バッハ)他、ブクステフーデ、シュッツ 指揮：佐々木正利

10 月 14, 18 日 「カンタータ第 140 番、コーヒーカンタータ」 カンタータ 140 番、コーヒーカンタータ

指揮：H. ヴィンシャーマン、ドイツ・バッハゾリステンと共演

1992 年

3 月 21 日 「バッハとメンデルスゾーンのカンタータの夕べ」

カンタータ 93 番ほか

指揮：佐々木正利

1993 年

10 月 20, 24, 29 日 「マタイ受難曲」(盛岡、仙台、岡山、東京)

マタイ受難曲(J. S. バッハ)

指揮：H. ヴィンシャーマン、ドイツ・バッハゾリステンと共演

1994 年

7 月 25 日 「カンタータ 147 番」仙台バッハアカデミーにおいて カンタータ 147 番

指揮：佐々木正利、仙台フィル・バッハアンサンブルと共演

12 月 18 日 弘前市民クリスマス：G. F. ヘンデル「メサイア」演奏会に出演 指揮：佐々木正利

1995 年

4 月末～5 月 第 3 回ドイツ演奏旅行 天地創造(J. ハイドン)ほか 指揮：ヨセフ・ツィルヒ、佐々木正利

8 月 26 日 一関・東日本合唱祭参加 モテット 6 番ほか 指揮：佐々木正利

9 月 26 日 剣持清之・トリオフィオリーレ「モーツァルト室内楽の夕べ」(主催)

10 月 8 日 青山町教会チャペルコンサート 天地創造抜粋(J. ハイドン)ほか

指揮：小原一穂

11 月 22, 23 日 「天地創造」(盛岡、仙台) 天地創造(J. ハイドン)

指揮：岩城宏之、オーケストラ・アンサンブル金沢と共演

1996 年

3 月 15 日 「バッハの夕べ」演奏会 カンタータ 21, 131 番、モテット 4 番 指揮：佐々木正利

1997 年

4 月 13 日 20 周年記念演奏会 「昇天祭オラトリオ」「マニフィカト」ほか(J. S. バッハ)

指揮：H. J. ロッチュ、佐々木正利

1998 年

11 月 20 日 「ヴィンシャーマンの口短調ミサ」演奏会 ミサ曲口短調(J. S. バッハ)

指揮：H. ヴィンシャーマン、ドイツ・バッハゾリステン、盛岡コーロ・デラ・パーチェと共演

12 月 12 日 「盛岡いのちの電話」チャリティーコンサート

カンタータ 151 番, 191 番、讃美歌数曲 指揮：佐々木幹雄

1999 年

4 月 20 日 シュッツのダビデ詩篇とバッハ、メンデルスゾーンのモテットの夕べ

ダビデ詩篇曲 3 曲(シュッツ), モテット 3 番(J. S. バッハ), モテット 3 曲(メンデルスゾーン)

指揮：佐々木正利

11 月 11, 12 日 第 4 回ドイツ演奏旅行 ケンペン・プロブスタイ教会 ボン・ベートーヴェンホール

ミサ曲口短調(J. S. バッハ) 指揮：H. ヴィンシャーマン、ドイツ・バッハゾリステンと共演

1999 年

- 11 月 14 日 インゲルハイム・ザール教会
ダビデ詩篇曲 3 曲(シュッツ)、モテット 3 番(J. S. バッハ)、モテット 3 曲 (メンデルスゾーン)
指揮: 佐々木正利
- 12 月 22 日 「盛岡いのちの電話」 チャリティーコンサート
モテット、三つの宗教的な歌ほか (メンデルスゾーン)、オルゲルビューヒライン(J. S. バッハ)
指揮: 佐々木正利

2000 年

- 11 月 23 日 クリスマス・オラトリオ全曲演奏会 クリスマス・オラトリオ(J. S. バッハ)
指揮: H. ヴィンシャーマン、ドイツ・バッハゾリステンと共演

2001 年

- 3 月 13 日 「盛岡いのちの電話」開局 10 周年記念 チャリティーコンサート
十字架上のイエス・キリストの七つの言葉(シュッツ)ほか 指揮: 佐々木正利
- 8 月 11、12 日 岡山バッハカンタータ協会主催ドイツ演奏旅行に有志(24 人)同行参加
ライブツィヒ・聖トーマス教会聖歌隊席、クヴェトリンブルグ・シュティフツ教会
カンタータ 39 番, 102 番, 158 番, モテット 6 番(J. S. バッハ)
指揮: D. ティム、ライブツィヒ・バロックオーケストラと共演
- 10 月 16 日 クルト・マズア指揮ロンドンフィル ベートーヴェン「第九交響曲」演奏会
交響曲第 9 番「合唱」(ベートーヴェン) 在京のパイオニア合唱団と共演

2002 年

- 1 月 13 日 25 周年記念演奏会
モテット Op. 29, 74 (ブラームス)、カンタータ 150 番, 184 番, 39 番 (J. S. バッハ)
指揮: 佐々木正利、東京バッハ・カンタータ・アンサンブルと共演
- 10 月 4 日 ライプツィヒ・バロックオーケストラ演奏会
カンタータ 45 番 (J. S. バッハ)、グローリア 二長調(ヴィヴァルディ)
指揮: D. ティム、ライブツィヒ・バロックオーケストラと共演
- 12 月 3 日 鳴海真希子さん追悼演奏会
ヨハネ受難曲から第 39, 40 曲(J. S. バッハ) 指揮: 佐々木正利
- 12 月 22 日 久慈・こはくのまち第九演奏会 交響曲第 9 番「合唱」(ベートーヴェン)
指揮: 石川善美、東北大学交響楽団、久慈市民第九合唱団と共演

2003 年

- 11 月 30 日 マタイ受難曲演奏会盛岡公演 マタイ受難曲(J. S. バッハ)
指揮: H. ヴィンシャーマン、ドイツ・バッハゾリステンと共演
- 12 月 5 日 マタイ受難曲演奏会東京公演

2004 年

- 7 月 28、30、31 日 仙台宗音、岡山バッハカンタータ協会、高知バッハカンタータフェライン主催の
ドイツ演奏旅行に有志(38 人)参加
アイゼナッハ・聖ゲオルク教会演奏会、アイスレーベン・聖アンドレアス教会演奏会、
ライブツィヒ・聖トーマス教会演奏会
カンタータ 131 番, 21 番 (J. S. バッハ)
指揮: D. ティム、ライブツィヒ・バロックオーケストラと共演

2005 年

- 1 月 30 日 マルコ受難曲演奏会 カンタータ 106 番、79 番、105 番 マルコ受難曲(J. S. バッハ)
指揮：佐々木正利、東京バッハ・アンサンブルと共演
- 4 月 15 日 シュレスヴィッヒ・ホルシュタイン・アカデミー合唱団盛岡公演
羊飼いの歌ほか(メンデルスゾーン)、アヴェ・マリアほか(シューベルト)、婚礼の合唱ほか(ワーグナー)
流浪の民(シューマン)、赤とんぼ(山田耕筰)
指揮：佐々木正利、ロルフ・ベック
- 12 月 27、28 日 第 5 回ドイツ演奏旅行
ミュンヘン・ヘラクレスザール、グラーフィング・シュタッドプファール教会、
デットモルト・ノイエアウラ
メサイア/ドイツ語版 (ヘンデル)、クリスマス・オラトリオⅠ～Ⅲ部 (J. S. バッハ)、
交響曲第 9 番「合唱」(ベートーヴェン)
指揮：G. シュマルルフス、
バイエルン州立歌劇場管弦楽団、北西ドイツ・フィルハーモニー管弦楽団と共演

2007 年

- 1 月 28 日 ヨハネ受難曲演奏会 ヨハネ受難曲(J. S. バッハ)
指揮：H. ヴィンシャーマン、東京バッハ・カンタータ・アンサンブルと共演
- 6 月 3 日 飯靖子・佐々木正利ジョイントリサイタル(主催)
- 12 月 21 日 盛岡市民文化ホール開館 10 周年記念 マーラー「復活」演奏会
合唱団として出演した「復活公演祝祭合唱団」に有志 98 人が参加
交響曲第 2 番「復活」(マーラー)
指揮：飯森範親、東京交響楽団と共演
- 12 月 23 日 台湾「クリスマス・オラトリオ」演奏会 長榮交響楽団：主催
仙台宗教音楽合唱団、岩手大学合唱団と共に有志(25 名)が参加
クリスマス・オラトリオⅠ～Ⅲ部(J. S. バッハ)
指揮：G. シュマルルフス、長榮交響楽団と共演

2008 年

- 6 月 1 日 珠玉のカンタータ ～バッハからの贈り物～
カンタータ 18 番、187 番、78 番、182 番 (J. S. バッハ)
指揮：佐々木正利、東京バッハ・カンタータ・アンサンブルと共演
- 12 月 30、31 日 スイス演奏旅行
合唱団として出演した「2008 スイス・ジルヴェスター祝祭合唱団」に有志(39 名)が参加
チューリッヒ・ヤコブ教会、パーゼル・クララ教会
マニフィカト(ブクステフーデ)、カンタータ(テレマン)他、シュッツ、賛美歌等
指揮：佐々木正利

2010 年

- 1 月 31 日 リリング・ロ短調ミサ盛岡公演 ミサ曲ロ短調 BWV232 (J. S. バッハ)
指揮：H. リリング、オーケストラ・アンサンブル金沢と共演
- 10 月 11 日 花巻温泉チャペルコンサート 指揮：佐々木正利
- 12 月 25 日 東フィル・第九演奏会 交響曲第 9 番「合唱」(ベートーヴェン)
指揮：D. エッティンガー、東京フィルハーモニー交響楽団と共演

2011 年

6 月 19 日 東日本大震災の犠牲者に捧ぐ モーツァルト・レクイエム演奏会
交声曲「主よあわれみ給え」より (大中寅二)、モテット 2 番 (J. S. バッハ)、
レクイエム・ニ短調 (モーツァルト)
指揮：佐々木正利

2012 年

2 月 12 日 35 周年演奏会 イタリア・バロックの煌めき
キリエ、クレド、マニフィカト (ヴィヴァルディ)、主を誉め称えよ (コレット)
ミサ曲イ長調 (J. S. バッハ)
指揮：佐々木正利、東京バッハ・カンタータ・アンサンブルと共演

2013 年

1 月 13 日 バッハからの贈り物 珠玉のカンタータ Vol. 2
カンタータ 4 番、93 番、161 番、102 番 (J. S. バッハ)
指揮：佐々木正利、東京バッハ・カンタータ・アンサンブルと共演

8 月 4, 7, 9 日

ドイツ演奏旅行

SASAKI-KANTOREI-JAPAN の構成団体として、

仙台宗教音楽合唱団、岩手大学合唱団、松江バッハ・カンタータ・フェライン等とともに参加

8/04 ローテンブルク 聖フランシスカーナ教会

8/09 ロストック 聖ニコライ教会

H. シュッツ「宗教的合唱曲集」より

J. S. バッハ カンタータ 68 番、102 番より

J. ブラームス「ドイツ・レクイエム」より抜粋

指揮：佐々木正利

8/07 ライプツィヒ 聖トマス教会

J. S. バッハ カンタータ 46 番、105 番、102 番

指揮：D. ティム ライプツィヒ・パウリナー・アンサンブルと共演

なおこのほかにも、クリスマス・チャリティーコンサート、チャペルコンサート、合唱祭、新春コーラスコンサート
などに参加、出演しています。



2013.8.7 ライプツィヒ・聖トマス教会

合唱出演者

《ソプラノ》

青瀧 憲子	◎赤塚 温子	朝倉 美優	磯沼 佳世	○板宮 渚	大矢 克子
小笠原香澄	岡野美映子	岡山ひかり	小川 牧子	加藤 真香	菊地明日香
○熊谷沙也加	熊谷 充代	昆 千晶	昆野 志穂	斎藤 純子	◎佐藤 澄江
佐藤 千明	柴 絵梨奈	高橋 沙綾	高橋みずき	高橋 悠奈	千田 絵未
千葉愛利紗	外崎 麻子	中関 彩花	中村 美咲	本良いよ子	飯淵 正子*
石澤 信子*	伊藤 律子*	今井 みや*	大淵 優香*	小坂 洋子*	後藤 直子*
小林 澄子*	近藤 順子*	圓谷 範子*	中尾 眞枝*	中嶋 帝子*	樋口ちひろ*
福田 良子*	増田 明子*	山室ふさ子*			

《アルト》

◎在原 泉	猪狩 裕海	○一守奈那子	植松 智穂	☆小川 暁美	小川 暁子
金子 千鶴	桐原 絹子	小坂 文代	佐々木美智子	佐藤 公	鈴木 英美
高橋 知子	◎田口千紗都	○多田 繭子	野澤安里彩	原 穂波	藤澤 久子
藤代 伸子	本田 奏子	牧野 起奈	三宅真佐子	茂木 容子	渡辺しをり
井上 紘子*	大友 利恵*	小高わか奈*	菊池 春子*	今野 早苗*	櫻井加代子*
佐々木潔子*	柴田 映子*	下永恵美子*	白石 洋子*	鈴鴨よしみ*	竹内 望*
畠山三枝子*	早坂 陽子*	三浦 香苗*	水戸由貴子*	柳父かほる*	矢野 道子*
山岸 美紗*	吉岡 英子*				

《テノール》

赤荻 周悟	○伊藤 陽平	小川 隆弘	加藤 進也	☆佐々木幹雄	田中 雅史
中野 奏保	◇新山 隆健	◎西野 真史	細沼 佑貴	○堀川 佑也	◎吉村 哲
浅見 学*	川村 博敏*	河原 清*	北岡 倫典*	鈴木 博丈*	吉谷地勝久*
高瀬 重嗣*					

《バス》

阿部 薫	荒井 渉吾	○宇津野智成	大室 桂太	☆小原 一穂	○小菅 悠樹
◎佐藤 和久	佐藤 玲央	高橋 聡	玉山 彰彦	田村 高幸	千田 敬之
角掛 裕喜	遠山 徹	西屋 健	芳賀 郁夫	長谷川亮介	森 順一
渡辺 信之	及川 洪*	菊地 安雄*	佐々木健一*	穴戸多加志*	鈴木 孝裕*
高木 正己*	長沢 彦士*	中村 元保*	成田 丈二*	山岸 健一*	若林 敦盛*

* 仙台宗教音楽合唱団

☆ コンサートマスター/ミストレス

◇ アシスタント・コンダクター

◎ パートリーダー

○ サブパートリーダー

以呂波耳本へ止
千利奴流乎和加
餘多連曹津孫那
良年有為能於久
耶万計今已在天
阿佐伎喻又美之
恵比毛勢得



三洋印刷
MISAWA

盛岡市蛇屋町15-17
TEL 019-622-9089

会 員 募 集

盛岡バッハ・カンタータ・フェラインでは会
員を募集しています。佐々木正利先生の指導の
下、ぜひ一緒に歌ってみませんか？11月から
は、モーツァルト/レクイエムの練習も始まり
ます。

合唱が好きな方、年齢、経験問わず歓迎いた
します。お気軽に見学においでください。

■練習日時：毎週火曜日 午後6時半～9時

■練習場所：日本基督教団 内丸教会
(盛岡中央郵便局前から与の字橋方
向へ、最初の交差点角手前右側)

※その他、毎月1回日曜日午後にも練習を行って
います。

■お問合せ：TEL 019-665-1614 (渡辺方)

URL <http://www.mbkv.jp/>

企画委員会	チーフマネージャー	渡辺 信之 (全般、渉外、印刷)
	サブマネージャー	堀川 佑也 (共演・楽譜)
	学生リーダー	小菅 悠樹 (PR、渉外)
	学生サブリーダー	猪狩 裕海 (特別会計)
	委員	野澤安里彩・本田 奏子・青瀧 憲子
実行委員会 事務局	特別会計係	猪狩 裕海・本田 奏子・千田 絵未
	共演・楽譜係	堀川 佑也・野澤安里彩
	チケット係	野澤安里彩・渡辺しをり・玉山 彰彦
	印刷係	渡辺 信之・青瀧 憲子・朝倉 美優
	PR係	小菅 悠樹・本田 奏子・青瀧 憲子
	記録係	青瀧 憲子・玉山 彰彦・朝倉 美優
フロント担当		赤塚 貴史・磯沼 佳世・佐々木聡子 町田 直子・大石 敦子・菊池 敦子
バックヤード担当		茂木 容子 (トータル・チーフ)
ステージマネージャー		新山 隆健・佐藤 玲央・細沼 佑貴
ケータリング		原 穂波・熊谷沙也加・板宮 渚
レセプション担当		中野 奏保・千田 絵未・中村 美咲

次回演奏会のお知らせ

■ドイツ・レクイエム仙台公演

～ピアノ2台の伴奏による～

2014年1月13日(月)15:00

東京エレクトロンホール宮城

(仙台宗教音楽合唱団と共演)

チケット発売中

前売2,000円(学生1,000円)

ローソンチケット(Lコード:24163)

■モーツァルト・レクイエム演奏会

2015年2月15日(日)

盛岡市民文化ホール大ホール

デザイン	本郷由紀子
録音編集	IBC開発センター
スチール写真	カメラのキクヤ
印刷製本	三澤印刷

